



著者の人生論は、1960年代から、多くの若者に生き方の指針を与えてきた。本書は、逆境での回復力を意味する「レジリエンス」について、親や教師ではなく、自らの力で獲得するものと主張する。他者から「あなたは素晴らしい」と言われて初めて「私は素晴らしい」と思える人、自分で自分の存在を確認できないで、自己同一性を他者に確認してもらったような人、他者から認められて自我の確認ができるという人は、結局は「自分自身が自分の内容となることができない」という。主体の成長を抜きにした安易な受容論、自己肯定論は、深い人間理解を妨げるものといえよう。

たとえば、レジリエンスのある親は、子どもが不登校になっても、「我が家が抱えている問題を眼に見える形で表現してく

どんなことから立ち直れる人 逆境をはね返す力 「レジリエンス」の獲得法



加藤諱三 著
1012円 PHP新書
☎03-3520-9633

れたのだから良かった」ととらえるという。同時に、子どもにとっての「愛他主義的仲間関係」の重要性を指摘する。これは、親の「利己主義的仲間関係」とは異なる他者との、助け合う関係、励まし合う関係である。これが、レジリエンスのある人のライフラインとなる。青春期に愛他主義的仲間関係をもっている人は強いと著者はいう。

評者は、若者の居場所の中で、いつとき「絶望の淵」にも立ち、それでもなお真摯に生きる若者に会ってきた。彼らは「自分自身が自分の内容となる」ための追求を続けている。そういう若者との出会いは、一般青年にとっても、通常の人間関係以上の意味をもつ。学校教育においても、愛他主義的仲間関係のある居場所において、いつもの人間関係とは異なる他者との出会いのなかで主体性を育めるよう、子どもたちを支援する必要があると考える。

(前聖徳大学教授・西村美東士)